

# 同義語と詞性の関係について

安 本 武 正

## Synonyms and the “Ci xing”

Takemasa Yasumoto

近年中国から出版された中国語の語彙に関することを書いた書物や論文の中で、再び同義語と詞性<sup>(1)</sup>の関係の問題に触れているものがある。たとえば、華中師範学院中文系現代漢語教研室編『現代漢語詞彙知識』（湖北人民出版社1979、以下『師範本』と言う）、謝文慶著『同義詞』（同1982、以下『謝氏文』と言う）、高更生等編『現代漢語資料分題選編』上冊（山東教育出版社1982）の中に収録されている方丈一『同義詞弁析中の幾個問題』（『浙江師範学院報』1980.1期、以下『方氏文』と言う）が、そうである。

この二書一篇が述べているものには一つの共通点がある。それは張世祿『詞義和詞性的關係』（『語文學習』1956.7月号、以下『張氏文』と言う）が述べている説を踏えている事である。具体的に言うならば、『張氏文』が結論づけている「異なる品詞の単語でも、その意味が近似していれば、これは同義語である」という説については、考え方には多少の違いがあるにしろ、三者が一致してこれを肯定している事である。

そもそも『張氏文』というものは、1950年代の中国の語学誌上で、同義語と詞性の関係をめぐって議論を交した幾つかの論文の中の一つである。だが、四半世紀過ぎた今日においても、なぜ再びこの問題を取り上げて論ぜざるを得ないのか、50年代の議論の結果にはどのような問題が存在しているのか、また、この二書一篇には、

果してどのような新しい問題が提起されているのであろうか。これらの点を検討するのが、小文の中心的テーマである。これを検討するためには、この二書一篇の内容を考えると同時に、また50年代の議論の内容をも顧みる必要があるだろう。

取り敢えず上述の二書一篇から見ていくことにする。ここでは、これらが同義語と詞性の関係について下している結論だけを書いて置く。それぞれの結論は次の通りである。

同義語は一般に詞性の同じものが比較的多いが、しかしまた詞性の異なるもの、或いは完全に異なっているものもある。（師範本）

同義語は語彙の意味を主とするが、適当に品詞のことをも考慮する。つまり、出来得る限り語義が同じか近似しているもので、同じ品詞の単語によって構成するものである（中略）。しかしまた現代中国語の中では、一部の単語には帰類（決まった品詞に定めること—引用者）することに困難があることを見極めるべきである。（中略）同義語の中には時には異なる詞性が存在することも認めるべきで、このような研究も実用的な価値がある。（方氏文）

張世祿氏の考えには賛同する（中略）。その理由は同義語の「同義」とは、語彙の意味の同じであることを指すもので、文法の意味の同じことを指すものではない。（謝氏文）

上に記した内容から見ると、『謝氏文』のよう

昭和60年10月31日受理

・ 一般教育部助教授